



グウォン
権

オー
五
景

職 名 教授

担当科目 産業史、経済史、
中小企業論、韓国語Ⅰ・Ⅱ、
ゼミナールⅠ後・Ⅱ前後・Ⅲ・Ⅳ

E-mail gwon@nagaokauniv.ac.jp

研究テーマ (1)地域格差解決の担い手としての地域企業
(2)地域資源の活用事例

研究業績 著書

- 平成28年6月 「依存から競合，そして新たな共存へ向かいつつある日韓経済（第2章）」『国家主義を超える日韓の共生と交流』（李ミン珍・鞠重鎬・李正連編）明石書店
- 平成27年4月 「長岡製造業の良さを世界市場につなげるのみ」『消滅してたまるか』（地域ルネッサンス創造機構シンクタンク・ザリバーバンク／文芸春秋企画出版部編）文芸春秋
- 平成22年3月 韓国経済の現状の課題（ERINA編）日本評論社
- 令和6年1月 「十分杯の特徴的構造とサイフォンの原理について」『長岡大学 研究論叢』（22）pp.35-50.
- 令和5年11月 「地域衰退の背景と対策への必要条件としての地産地消－新潟県栃尾織物産地の事例－」『長岡大学地域連携研究』（10）pp.59-78.
- 令和4年11月 「栃尾織物産地が生き残るための条件」『長岡大学地域連携研究』（9）pp.41-56.
- 令和4年3月 「地理的特性や文化的特性の活用とそれを活かせる人の移住こそが地域間格差は正の出発点」『長岡大学 研究論叢』（20）pp.89-110.
- 令和2年8月 「小千谷縮布は何を残したのか－産地の発展と衰退及び地域間格差の観点から－」『長岡大学 研究論叢』（18）pp.39-64.
- 平成29年8月 「欧州小国スロヴェニアの地方企業から日本の地方企業への示唆」（小山洋司と共著）『長岡大学 研究論叢』（15）27-42
- 平成28年11月 「先進国になるための必要条件と十分条件－新潟県長岡市の機械工業の事例を通じて－」長岡大学『地域連携研究』（3）95-103
- 平成27年11月 「技術の収斂先としての地域企業－新潟県中越地域の産業系譜図の作成から見えたもの－」『長岡大学地域連携研究』（2）pp.65-68
- 平成27年7月 「創業年と企業規模からみた対韓輸出日本企業の特徴－中小企業が弱いから対日貿易赤字になるのか－」『長岡大学研究論叢』（13）25-43
- 平成26年11月 「産業集積の規模は何に依存するのか－長岡と浜松の比較を通じた長岡市と産業界への提言－」『長岡大学地域研究』（9）125-139
- 平成21年11月 「変わりつつある韓国の中小製造企業」（共著）『調査月報』日本政策金融公庫（2009年11月号）
- 平成19年12月 「北朝鮮の瀬戸際外交をめぐるゲーム理論的解説」『国際金融』財団法人 外国為替貿易研究会1183号
- 平成19年12月 「韓国における部分保証制度の導入と意外な展開」『信用保険月報』中小企業金融金庫（2007年12月号）

学会報告論文

- 平成30年8月 「豊かな地域（国）と貧しい地域（国）の理由に関する小考（韓国語）」『第33回日韓経済経営国際学術会議予稿集』
- 平成29年8月 「地域資源の観点からみた国家間・地域間経済格差」『第32回日韓経済経営国際学術会議予稿集』
- 平成27年8月 「依存から競合，そして新たな共存へ向かいつつある日韓経済」『第30回日韓経済経営国際学術会議予稿集（共通論題）』

報告書

- 平成22年12月 「対韓国輸出日本企業の規模、歴史、技術蓄積に関する研究」（助韓日産業・技術協力財団）
- 平成17年4月 『アジアの金融環境調査』大和総研（経済産業省委託）

略歴

- 平成29年4月 長岡大学経済経営学部教授（現在に至る）
- 平成19年4月 長岡大学経済経営学部准教授
- 平成17年4月 長岡大学助教授
- 平成14年4月 長岡大学講師
- 平成13年4月 長岡短期大学講師
- 平成12年4月 環日本海経済研究所（ERINA）調査研究部研究助手
- 平成12年3月 博士（経済学）（新潟大学）
- 平成12年3月 新潟大学現代社会文化研究科日本社会文化論専攻博士課程修了（日本国費留学生）
- 平成9年3月 新潟大学経済学研究科経済学専攻修士課程修了（日本国費留学生）
- 平成6年2月 韓国嶺南大学商経学部経済学科卒業

所属学会

東アジア経済経営学会

テーマNo.1	大学って行く意味あるの？進学の特権を考えよう
内 容	今の日本では、高校卒業後、およそ6割弱の人が4年制大学に進学している。だが、進学率の高さと裏腹に、「大学に行くと何が得られるの？」「行く意味って本当にあるの？」と疑問に思っている人も多いだろう。例えば、65歳まで働いた場合の生涯賃金は、大卒と高卒で約5千万円の差が出ると言われている。こうした賃金格差は、大学進学を推奨する大きな理由の一つだが、背景には国や企業の思惑もある。「働く人の質を高めることで、生産性を高め、社会的ニーズに応えたい」と考えているからである。つまり、個人というよりは社会の都合に基づく側面が強い。だが、実際に「大学に行くべきか」「専門学校にするか」「すぐ働くか」で迷っている高校生にとっては、そんな理由だけでは納得できないはずである。 そこで、この講座では、大学に進学する意味について、次の2つの視点から掘り下げていく。 1. 「大卒」は、社会で生きるための“傘”のようなもの？ 日本では「大卒」というだけで、安心される場面が多く、社会生活での一種の“保険”のような役割を果たすことがある。 2. 大学進学は“投資”？ 大学に行くにはお金も時間もかかるが、その後の収入やチャンスを考えてみると、結果的に“元が取れる投資”になる場合が多いと言われている。 実際の講座では、具体的なデータや事例を紹介しながら、大学に進学することの意味や価値を一緒に考えていく。

テーマNo.2	豊かな国と貧しい国、豊かな地域と貧しい地域の違いから学生たちが学べるべきこと。
内 容	世界には多くの国々があるが、豊かな国もあれば、貧しい国もある。スイスは約200年前まではヨーロッパで最も貧しい国の一つだったが今は世界トップレベルの国に変わっている。一方で、東南アジア諸国は稲作に恵まれながらも豊かではない。また、日本国内でも、太平洋沿岸地域と日本海沿岸地域との間には格差がある。さらに、日本海沿岸地域のなかでも石油資源の発掘で発展した新潟県と秋田県だが、現在の様子はかなり異なる。長岡市は日本で6番目の地方機械金属の集積地であるが、秋田市は機械工業の集積はあまり見られない。本講座は、スイスの事例、東南アジアの事例、長岡と秋田の事例を紹介することで、勉強も部活も自分の長所を活かした独自の方法でやっていくことを勧めるためのものである。